

満洲からの命からがらの引揚げのこと

匿名希望（昭和20年、チチハル生まれ）

私は、生まれて6か月の時に、両親と2歳上の姉と4人で満洲のチチハルから引き揚げて来ました。父が南満州鉄道に勤めていました。

敗戦から1年が経っていました。ロシア人から逃れ、中国の方々の優しさに守られ、日本の地を踏むことが出来たと話してくれました。父は、やはり、部下を置いて帰ることは出来ないと出来る限りの策を講じて命を守る努力をしたと…。

38度線（当時のソ連とアメリカの朝鮮半島分割線）を越えるために、日本人であることをかくす目的で鍋墨を顔にも塗って夜中に歩いたこと。6か月の私が泣くことによって、共に逃げる隊に迷惑をかけることが一番心配だったこと。しかし、「それがわかるかのようにあなたは泣かずに良い子だった」こと。生かされた命なのですね。博多に着いて日本の土が踏めたらいいと思ったこと、様々な戦中戦後の話を聞かせてくれました。

戦争は敵も味方も不幸になる。勝つことにどれだけの意味があるのか、理解できなくてもとにかく一生懸命に「お国のために」が身にしみついてたこと。母は当時の日時も、日常の何もかもを、鮮明に覚えていてよく話してくれました。その生の声が物心ついてからの私の人生に大きく深く影響したことは事実です。命からがら私の命を生かしてくれたことに感謝と言い知れない感慨があります。